論文

大隈言道研究 Ⅶ

村山漢古の文事
『自覚談』と『詠草』（曽根崎・古賀家文書）をめぐって

進藤　康子

要約

江戸時代後期の博多の歌人、大隈言道研究第七。

佐賀県鳥栖市教育委員会の「曽根崎・古賀家文書」の中に、大隈言道の批点が施された村山漢古の和歌六十首を収める『詠草』がある。これは、漢古が晩年六十歳代で言道の門人となり、和歌指導を受けたことがわかる貴重な言道添削資料である。

漢学者として『自覚談』（嘉永五年刊）を、天保二年に書き終えた村山漢古であるが、漢詩文に留まらず、和歌、俳諧、雅楽、篆刻、一弦琴なども嗜み、文人との交流に於いては、本居宣長門の青柳種信、多久の草場珮川、福岡甘棠館の亀井南冥、亀井昭陽、日田咸宜園の広瀬淡窓、広瀬旭荘と多彩である。

これらの交流をもとに、田代代官所役人であった漢古の、文人としての人物像と、その作品とに光をあて、田代文化圏の豊穣なる学問の土壌とそのネットワークを辿っていく。

キーワード：大隈言道、村山漢古、自覚談、東明館、緒方東海、広瀬淡窓、咸宜園、青柳種信、草場珮川、亀井昭陽、古賀朝陽

一　はじめに

江戸時代後期、対馬藩田代領（現在の佐賀県鳥栖市）代官所役人であった村山漢古は、『自覚談』の著者として知られている。この『自覚談』刊本、および『自覚談』自筆草稿本などが収められている佐賀県鳥栖市教育委員会の「曽根崎・古賀家文書」の中に、大隈言道の批点が施された、村山漢古の和歌六十首と大隈言道の和歌一首を収める『詠草』が保存されている。これは、漢古が晩年六十歳代で言道の門人となり、通信教育のような形で和歌指導を受けたことがわかる貴重な資料である。

儒学者として『自覚談』の原稿を、天保二年に書き終えた漢古であるが、漢詩文に留まらず、和歌、篆刻、一弦琴、横笛など幅広く嗜み、文人との交流に於いては、本居宣長門の青柳種信、多久の草場珮川、福岡甘棠館の亀井南冥、亀井昭陽、日田咸宜園の広瀬淡窓広瀬旭荘、久留米の樺島石梁など多彩であった。

寛政四年に東明館の前身「稽古所」が設立され、その学頭緒方東海（又右衛門）[一]と共に、漢古は東明館設立に大いに貢献しており東明館読書口授方、訓導師などを歴任している。

そして、東明館が低迷した時にも陰ながら支え、その後は漢古の息子である村山東一郎[二]と、緒方東海の孫である緒方連が中心となって、東明館に、日田の広瀬淡窓を招聘し、文政十二年五月から淡窓によって集中講義がなされた。東明館に於いても、詩会が設けられたり、学力評価を行うために、甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸による月旦評が作成された。また、淡窓に続いて弟旭荘も集中講義を担当し多くの田代領の人々が講義に列した。このように、村山漢古親子は、田代の学政の興隆のために、淡窓、旭荘らを引き入れ、学問の下支えと牽引に大いに寄与していった。

このことにより、田代領の学問熱は高まりを見せ、連動するように田代からの咸宜園入門者が激増した。咸宜園『入門簿』によると、最初の門人は文化四年入門の門司郡吾と梁井慶次、次いで村山東一郎ら数人であったが、文政十二年、淡窓集中講義以後の田代出身者数は、五十数名に及んでいる。

また、佐賀与賀町の、今泉蟹守はこの田代の歌壇に注目し、『白縫集』（『今泉蟹守歌集』所収）に、漢古を含む田代の歌人の和歌を多く収載している。加えて、鍋島治茂、斉正、直正の三代に、御典医として仕えた轟木出身の古賀朝陽（侍医兼書物学訓導）と漢古との漢詩の交流があったことも新たな資料により判明した。このような当時の田代文化圏の学問熱の高さと、その土壌の裾野の広さ、文人たちの豊かな文化的交流の多彩さなどを、村山漢古の文事を一例として考察していきたい。

二　『自覚談』をめぐる人々

村山漢古は、名は勘吾。幼名は、理十。後に、成章。字は孟倬。号は、太白山人、南園。肥前田代養父郡蔵上村隅底に、明和七（一七七〇）年十二月十日生まれ、天保十二（一八四一）年十二月十五日、七十二歳で没した。詩文は、福岡の亀井南冥、昭陽、肥後の佐伯道明、秋月の原古処、広瀬淡窓、旭荘等を師友とした。漢詩、和歌、俳諧[三]、書道、篆刻、武術、一弦琴、盆花、雅楽の横笛などを嗜む一方、二十三歳で稽古所（東明館）の読書口授方、五十歳で東明館訓導師御領中風俗目付兼任となり、田代の教育の牽引的存在となっていった。

漢古が、肥前田代を代表する著作『自覚談』[四]の原稿を書き終えたのは、天保二年（一八三一）辛卯八月であった。その後、漢古は、広瀬淡窓、広瀬旭荘、草場珮川などに寄稿を求め、それらの批評を本文末に載せた。また、珮川の跋文（天保四年）、古賀穀堂の題辞（天保五年）、亀井昭陽の跋文（天保五年）を求め、写本の形で完成させた

が、実際に出版されたのは、嘉永五年（一八五二）であった。

広瀬淡窓の題字で、『自覚談』は満を持して出版され、多くの人の目に触れることとなった。これは、漢古没後から数えて、既に十一年を経過していた。淡窓は漢古より十二歳年下であったが、田代との交流の縁から、淡窓の手配により、出版は広瀬家の著述を多く手掛けている大阪心斎橋通博労町の岡田群玉堂から上梓されてのち広く世に流布[五]した。

淡窓と漢古との最初の出会いは、寛政六年（一七九四）、同じ田代の儒者で、福岡の亀井南冥と親しかった緒方東海に連れられて来たことが、淡窓の『懐旧樓筆記』巻四に、

此年ノ春、肥前田代ノ長官、当県ニ至リ、我家ニ止宿ス。其属吏緒方又右衛門来ル。田代ノ元占ニシテ、文学ヲ兼ネタリ。東海先生ト号ス。予相見シテ、之ニ詩ヲ贈レリ。又、村山堪吾ト云フ人、従ヒ来ル。之ハ彼ノ方ヨリ詩ヲ贈レリ。緒方ハ老人ナリ。南冥先生ト親シキ人ナリ。村山ハ此時二十五歳ナリ。

と記されている。これにより、緒方東海と村山漢古（堪吾）は、淡窓の家に宿泊、そこで、漢詩の贈答が行われたことや、漢古は当時二十五歳であったことが記されている。

その後、文化九年（一八一二）に、漢古の長子東一郎（村山允仲）が、日田咸宜園に入塾する。『入門簿』巻五「自文化九年八月至文化十一年四月」（四丁裏）に次の様にある。

肥前国基養郡田代町
村山東一郎
入門　文化九年壬申九月二十五日
紹介　広瀬正蔵[六]

紹介者は、淡窓の弟の広瀬正蔵（久兵衛）である。これらの縁で、文政十二（一八二九）年五月に、東一郎は、東明館創設者の緒方東海の孫である緒方連とともに、淡窓を東明館に招聘。集中講義はほぼ一ヵ月間行われた。『懐旧樓筆記』巻二十八によると、その時の受講生は、門下生の他、代官所役人や村長など七十名以上にも達したことが知られる。『陸詩』『小学』『左傳』『自監録』『楚辞』『孟子』『杜律』の講義や、情操陶冶のための詩作を奨励し「詩会」が行われるなどして東明館の学事不振を改善し、その一ヵ月後には、

旭荘が登壇し、集中講義を担当したことが『鉄斎日暦』巻四（『増補淡窓全集中巻』）に記されている。

集中講義の折、淡窓らは、村山家にも立ち寄り旧交を温めている。当時、漢古は、東明館の教官を六十歳で辞し、東一郎がそのあとを継いでいた。『懐旧樓筆記』巻二十八に漢古六十歳の折の記述が次の様にある。

田代ニテ、饗応ニ招カレタルコト、村山東一郎ノ家ナリ。（中略）漢古、主トナレリ。時ニ、漢古六十ナリ。之ガ為ニ寿詞ヲ作レリ

とあり、東一郎の家で、折しも漢古六十歳の祝いがあり、「寿詞」が作られたことが記録に残されている。

淡窓の塾への田代からの門人は、先に述べた、文化四年二月二十四日に入門の門司群吾と梁井慶次（両者とも広瀬家が親しくしていた荒木次平治の実子で、それぞれ門司家養子、梁井家養子となる）や、その後すぐ入門した東一郎などの数名であったが、文政十二年の淡窓の集中講義以降、学問への情熱は高まり、東明館は俄かに盛況となった。また、田代から咸宜園への入門者も、五十八名と増加した。田代地域の役人、医師、僧侶なども入門し、田代からの入門者数は他地域と比べて突出して多くなった。

田代からの咸宜園入門者の一例を詳しく挙げると、『入門簿』に次の様にある。

『入門簿』続編巻二

○　肥前国田代
荒木吉次
入門文政十二巳丑　五月

○　肥前国田代
原四郎右衛門
入門　文政十二巳丑　五月

○　肥前国田代
釈祐山
入門　文政十二巳丑　五月

といった具合に、荒木次平治の孫吉次の名もあり、同年同月の入門者が、立て続けに二十二名続いたことからも、いかに田代に学問熱が高まったかがわかる。吉次については、後に述べることとする。

文政十二年以後も

『入門簿』「亦楽編」巻五

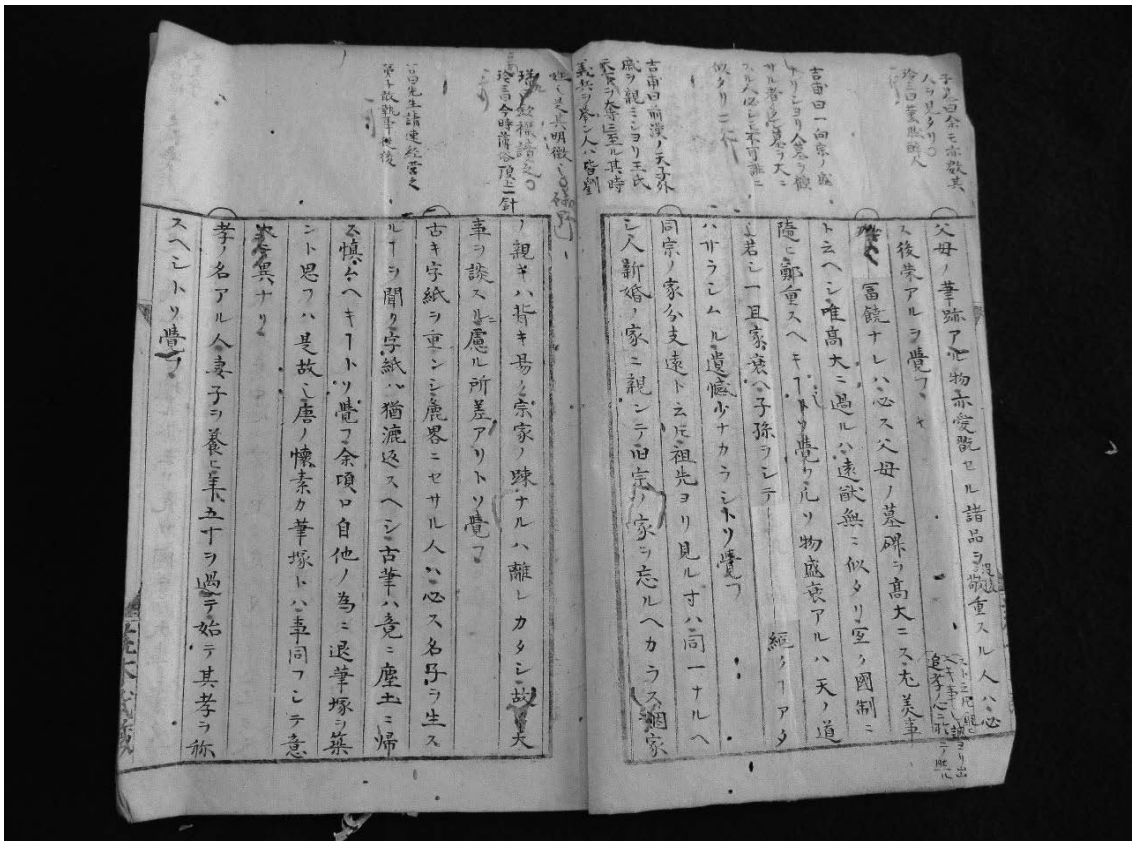
○　肥前国対馬領田代

緒方一郎
入門　天保十巳亥三月十八日
紹介　松隈種次郎

『入門簿』続編二十二巻
○　肥前国田代今町
平川一圭倅　平川見龍
紹介　村山東一郎

などと続いた。東一郎も紹介者として名を連ねており、田代と日田との文化交流の深さを改めて確認出来る。

また東明館においては、「東明館規約十五則」を淡窓が撰したものを緒方蓮が浄書し、その教えが伝えられ、日常的に四書五経の素読は句読師により行われた。安政の頃になると、東明館は、御茶屋跡に移転となり、安政二年、新たに開館した。『佐藤恒右衛門毎日記』七）によると、その時の様子は、明館学頭となった緒方蓮が『中庸』の講談を務め、手代役はやはり漢古の子東一郎であった。東明館での文道は第一に修身の業であり孝悌忠信であり実用を旨としていた。嘉永年間の講義題目としては『孝経』『左伝』『大学』『易経』『論語』『中庸』『新論』が記録されている。『新論』のような水戸藩の尊王攘夷思想も講義されており、時世を読む臨機応変な東明館の気風が伺える。

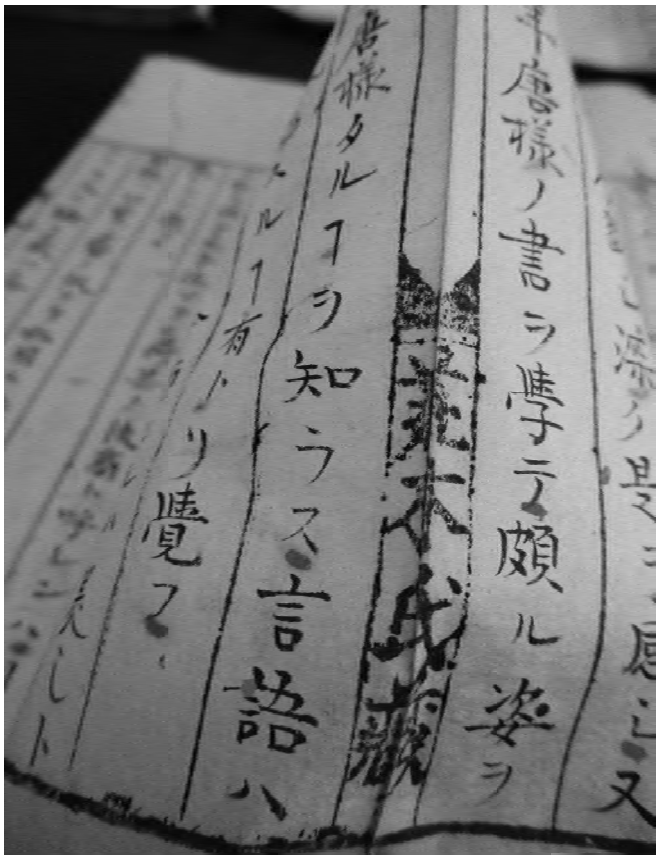


①『自覚談』自筆草稿本（鳥栖教育委員会「曽根崎・古賀家文書」）

（五）

『自覚談』には、淡窓、旭荘、珮川などの言を夥しく引用し、自説を補強する形をとっている。一例を見ると次の如くである。

淡窓曰、余今日ヨリ此語ヲ服膺スヘシ、
茲ハ親ノ誠ナリ、孝子ヲ得テハ其愛イヨ々篤カルヘシ、
國政ハ君ノ重任ニシテ、忠臣ヲ待モノナレハ、ソノ寵
イヨ々深カルヘシ、風邪ハ暖夜ニ入易シ、臣子タル者ハ、
寵ト愛トヲ恃ミ、敬ノ一字ヲ缺クマジキコトトゾ覚ユル。



②『自覚談』同上　料紙の柱「荒木氏蔵」

猶、先に述べたように、鳥栖市教育委員会には、漢古没後の嘉永五年に上板された『自覚談』刊本上下二冊とは別に、天保二年辛卯八月に書き終えた自筆原稿『自覚談』が保存されている（写真①）。これは、漢古の欄外への膨大な細かな書き込みや、本文の張り紙が多数あり、試行錯誤の跡をみることができる貴重な資料である。料紙は、柱刻に、予め「荒木氏蔵」（写真②）とある罫紙を使用していることから、対馬の御用商人広瀬家と繋がりのある荒木家が料紙を提供したであろうことが窺える。

当時、田代有数の商人である荒木家からは、先に述べた荒木次平治、その孫荒木吉次などの名を採取することができ、次平治宅に淡窓は旅宿として数日過ごした記録[八]が残っており、荒木家は田代文化圏の文人たちを支え続けたことが判る。

吉次は田代領の札発行を行い、最盛期には広瀬家に融資していたが、天保十四年頃に、吉次の家の商売は、幕府の打ち出した一朱銀通用停止策で破産に追い込まれる。門司家文書『口上覚』によると「打ち続き莫大の損失」「身上不如意」とあり、吉次は大阪まで行き再起を図ったが不振で、とうとう後始末は自分たちでは出来ず、広瀬久兵衛に処理を依頼することとなる。

その吉次は、『自覚談』には、次の様に、

（六）

吉次曰、昌言、敬服敬服、吾家老父年過耳順、
以平生強健、漫然延志於来年、欠些孝思、
今茲仲秋、十五夜、暴病、脉絶舌枯、片刻之間、
殆乎不起、與家驚走（中略）

と記述されている。

そして、更に『自覚談』に多くの文言を引用され、『自覚談』下巻に跋文まで寄せた、佐賀藩多久邑の儒学者草場珮川は、『珮川詩鈔』巻四[九]に於いて、漢古のことを次の様に物語っている。

村山孟倬　田代人、近詠国雅一巻ヲ寄セラル。
蓋、已ニ　六十過ギテ始メテ之ヲ学ブ。精魄畏ルベシ。
此レヲ作リ回シ贈ル

とあり、漢古がすでに六十歳を過ぎてから和歌を学び始めたことに驚嘆し、「精魄畏ルベシ。」と讃えている。ここに記述されているように、漢古は、六十歳を過ぎて、和歌の道を学ぶため福岡の歌人大隈言道に入門するのである。

三　新資料『詠草』

「曽根崎・古賀家文書」の中から、大隈言道の批点を持つ『詠草』があることがわかったのは、鳥栖市誌編纂のための調査の折であった。この『詠草』は、漢古の和歌六十首からなる墨付き七丁の詠草である。

こは天保二卯としの春より齢六十二にて唯心おこし、翌辰七月まで詠じ歌也。夫より再び任にありてやみぬ
こは天保申の秋より再び思ひおこして去る冬までの歌也。歌のすがた少しく初にことなればふたつにかゐつけぬ。言道大人よみておくる

の詞書きより、漢古六十二歳の天保二年からはじまり、翌年まで続いたところで一旦終わり、天保七年に再開されたことが分かる。このころは、野村望東[一〇]夫妻などが次々に言道に入門しており、和歌の師としての活動が活発になっていく時期である。折しも、漢古が天保二年辛卯八月に『自覚談』をあらかた書き終わって、和歌に力を

入れ始めた時期と重なるのが注目される。

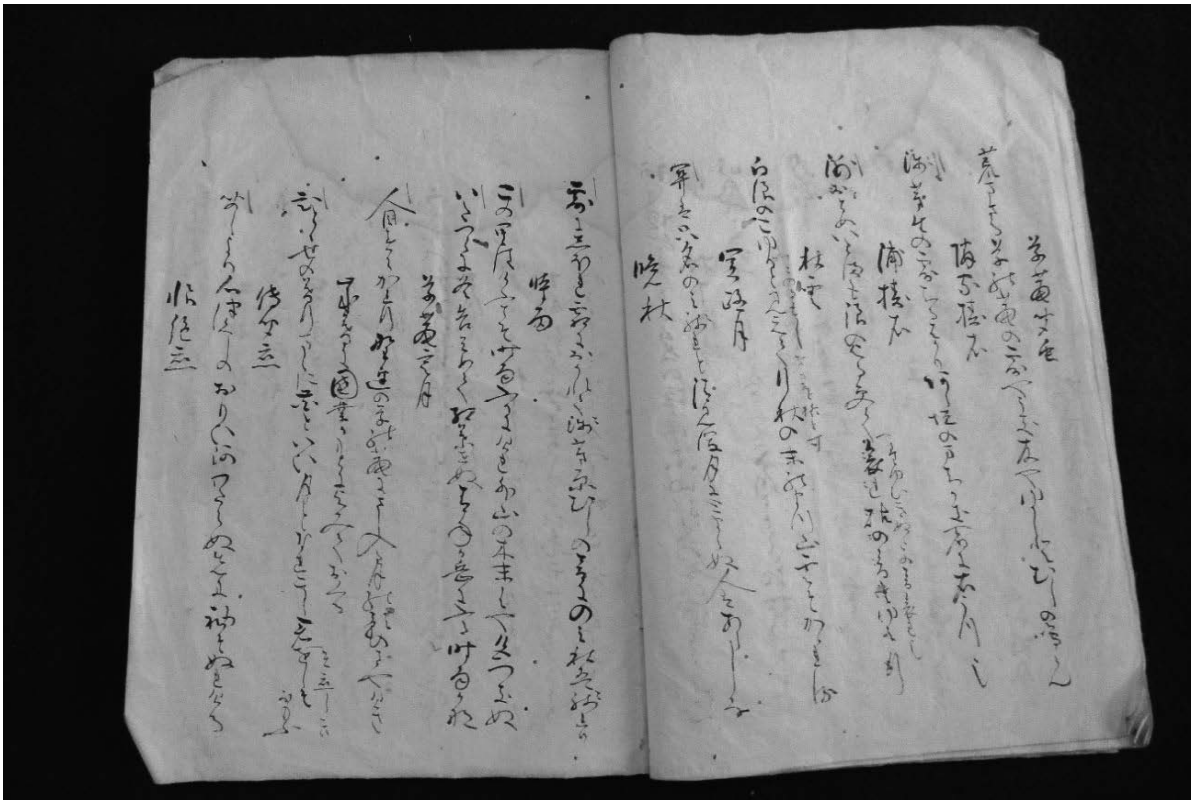
『詠草』（写真③）には、言道から添削指導を細やかに受けた跡が見受けられ、その批語、批点は、朱書と墨書があり、終わりには言道の和歌一首が、

あきゝぬときくぞうれしきことしより
月見るとものそひぬとおもへば

と添えられ、続いて批評が一丁に渡って記されている。

その最後には「あなかしこ」とあり、添削と手紙を兼ねた文言があり、通信教育が施されていた門下指導の実態を知ることができる貴重な資料であることが判明した。

現存する『詠草』の墨書は、筆跡により、すべて言道の手になるもので、言道自身が漢古の提出した詠草を清書をしてやり、その上から、更にまた批点を打つといった流れである。この指導様式は、実は、言道の飯塚の弟子小林重治家集『自詠集中抄』[二]などの実作指導する際にも行われていた。このように特別な門下には、言道がまるごと浄書したものにその上から更に朱で批正を認めていった。



③　村山漢古『詠草』（鳥栖市教育委員会「曽根崎・古賀家文書」）

（八）

この『詠草』詞書によれば

青柳の翁が先つ比、神風のいせなるすゝの屋にありて、
同じ学びの友がきの歌ども書あつめて、霞関集[三]と
名づけける文のはしに

とあるように、この頃、本居宣長門である福岡藩の青柳種信と何かしらの交流があり、国学を学んでいたであろうことや、「同じ学びの友がき」より、国学を学ぶ人たちの歌が集められた『霞関集』に言及するあたり、名立たる歌集などに自分も入集したいという志が類推できよう。その他の漢古の詠草類は、古賀益城著『村山漢古翁』[三]にも収載されており、また、漢古には、『老の山ぶみ』という詠草があったことが、東一郎『温情遺事』[四]（『村山漢古翁』所収）において次の様に知られている。

和歌は福岡の大隈言道を益友として、同じ家中にも歌のとり遣りありて、南園に隠居し玉ひしよりは、わけて和歌に心よせ楽しみ玉ひ「老の山ふみ」と云ふ一巻を得られ、自歌をしるし被置候。言道の選みし笠山集の内にもあまた君の詠み歌選に入たり

この『老の山ぶみ』が『詠草』の続編かとも考えられる。漢古致仕の六十七歳以降、南園に隠居した頃の晩年の作品であろう。

漢古が、言道と初めて会ったのは、天保十年（一八三九）三月であった。最晩年の七十歳の祝いをしている漢古を訪問したことが、言道の詠草『春野集』（谷川本）[五]によってわかる。

やよひはじめつかた、たしろのさとなるむらやまなにがしを
はじめてとぶらひけるに、ことしななそぢになりぬとて、いはひ
ごとゝもせられけるを、人々うちよりてうたなどよめりけるに、
いはひのこゝろをよめる
ことしよりあひみる物をあかましやかぎりなき世に君がまさずは
たしろよりひたのかたにゆきけるみちにてよめるうたおほく
ありしかどもみなわすれにけり
しるべなみおぼつかなげにのをゆけばはては道なし山ばかりして
山かげにかくると見えしくまかはのまた見えくなり道のゆくてに

これにより、言道は、漢古の七十の賀において「はじめて」まみえたことが知られ、言道とは、数年間、通信教育のような形で、添削批

点批言の文書の往来で指導を受け、直接対面したのは「たしろよりひたのかたにゆきける」の文言から、日田の淡窓の塾へ向かう途中に、経由して田代の漢古宅へ訪問した時であったことがわかる。

天保八年に淡窓の『遠思樓詩鈔』が刊行され、大変評判となっており、言道も、『遠思樓詩鈔』や淡窓の言説をかなり詠み込んだ後の天保十年四月、四十二歳での遅い入門であった[一六]のだが、言道は知遇を得て来賓扱いになった。言道の淡窓入門の目的は、漢詩の指導を仰ぐことで、漢詩漢文の造詣を更に深めようとしたものであり、実際の滞在は、一ヶ月にも満たなかったが、淡窓から詩学に関する理念の教示を受け多くを修学した[一七]のであった。淡窓は詩の世界で自己の天分を尊重し、言道は和歌の世界で故人の模倣を否定し、個性を尊重している点で共鳴し合あうところがあった[一八]と言えよう。

そして、言道は、思案中の歌論を根本から再確認することも入門の目的の一つで、その後、自分の歌風や理念に確信を得たのか、この時期の天保十年頃に『こぞのちり』が成り、その草稿をもとに、歌論『ひとりごち』執筆に取り掛かり、完成はその五年後[一九]となる。

漢古は、言道から、通信教育を受けていた期間に、言道の門下歌会をまとめた歌集『笠山集』[二〇]巻一から巻四のうち、巻三の歌集に入集している。『笠山集』は、天保三年から天保九年の間に編まれたのだが、その中でも巻三は、天保七年から八年頃に編集された歌巻で、まさに和歌修学途中の漢古の歌を見出す。言道が歌論においても言葉を尽くして述べていた歌の基本理念の、つぶやくような自然体の和歌を採取することができる。

う月はじめによめる　　漢古

おいのみはまだ風さむしなつごろも
ひるのましばしかへんとぞおもふ

四　『詠草』と田代

ここでは、言道の田代滞在について記述されている資料をもう少し詳しく述べていこうと思う。漢古七十の祝賀の前後に、言道はこの田代に滞在していたことは、言道自筆家集『今橋集』[二一]にも、次のように、

田代小松原のいほに一月ばかりありて
いづる月松はまちえて立たるをもるかげのみやおもが物なる

（十）

あかなくに出るは見えてまた見えぬ本あらの松のはがくれの月

と言道が記している。「田代小松原のいほ」は、漢古の草庵と思われるが、そこを拠点をして一ヵ月ほど滞在したことが認められており、その間、田代周辺の他の門人たちとの交流もあったと推察できる。

また、言道の書簡（a）～（d）には、次の様に書かれている。

田代きやぶの方も、四、五年前より私まゐりて候て歌の体一変仕候。唯一両年によくよみ直し候老人等も御座候。（a）

おなじところ（田代―筆者注）あらきなにがしがもとにして、さけのなゝどつけゝるとき、あふぎをいだして、うたをこひけるに、天保通宝のぜにのかたをかりければよめる（b）

たしろちかきこがのさとなる原なにがしがもとに、しばらくありける時、かしこにてうたなどよみけるついでに、みづいろのあふぎに、あめなどのごときあとありけるを（c）

明日よりしばし御帰栖　又の御出奉祈候

御申遣候短冊　書調御使へ相渡申候（略）

石夫雅伯　　言道

御うた何卒すこしづゝ御作是又いのり申候　わたくし存候だけはわかり易候様工夫いたし可申候[三]（d）

この言道書簡（a）の、「田代きやぶの老人」で、言道の指導で和歌が見違えるようによくなった勤勉な老人や、（b）の我が扇に言道の歌を所望した「荒木なにがし」、（c）の古賀の「原なにがし」などから、田代周辺には漢古以外にも多くの門下生がおり、（d）の「御帰栖」とあることから「石夫雅伯」は鳥栖の人であろうことがわかり、短冊を求められ、また彼が和歌の添削も願い出たこと、「わかり易候様工夫いたし可申候」と述べたことなど、大変気遣いが細やかである。

漢古は、佐賀与賀町の今泉蟹守[三]からも注目されていたようで、『今泉蟹守歌文集』所収の『白縫集』[二四]には、漢古の歌二首が採られている。

庭の面に飛びかふ蛍ねになればいかにかなしき夕べならまし

霍公鳴て入にし暁の雲はいづこに消えてゆくらむ

（十一）

『白縫集姓名録』によると、この他に田代を中心とした歌壇から、三十人以上の作者が入集しており、これらの例から見ても、いかに田代歌壇の文事が盛んであったかが看取できる[二五]。

漢古没後、言道は漢古へ、七回忌、十三回忌と、追悼の和歌を手向けているが、言道自筆家集『甲辰集』[二六]の七回忌の追悼歌は、

たしろの里、村山漢古、さいつとしみまかりけるを、ことしはかに詣でてたむけつるうた

かすみたつ　たしろのさとの　こ松ばら　けふきてみれば　ありし世に　きみがいへらく　年をへて　死なばここにと　かねてより　おくつきどころ　しかもかく　さだめたまひて　終にかく　しづまりましぬ　うつせみの　よのことしげく　ゆく水の　早くもとはで　いたづらに　いつななとせの　春秋か経し

と、漢古の墓にわざわざ出向き長歌を手向けている。十三回忌には、

むらやまぬし、なくならせたまひて、とせあまりみとせの忌に、よみてつかはしける

とせあまり　みとせをへつる　そのまにも
まさばとおもふ　ことばかりにて

との歌を詠んで漢古を偲び、田代の地に思いを寄せている。

また、言道門下の野村望東の歌稿にも、言道の田代歌壇への訪問を次の様に述べている。

言道翁のたしろといふところに、ながくやどりて、かへらざりけるころ

きみをまつ　ひかずばかりに　くはゝりし　さ月もかひの無ことしかな　（歌番号147）『みのとしうまのとし』[二七]

翁のまた都におもひたゝれぬ先つかた、田代のさとにゆきて、うるふ五月のすぐるまでかへられざりける比、よみてつかはしける

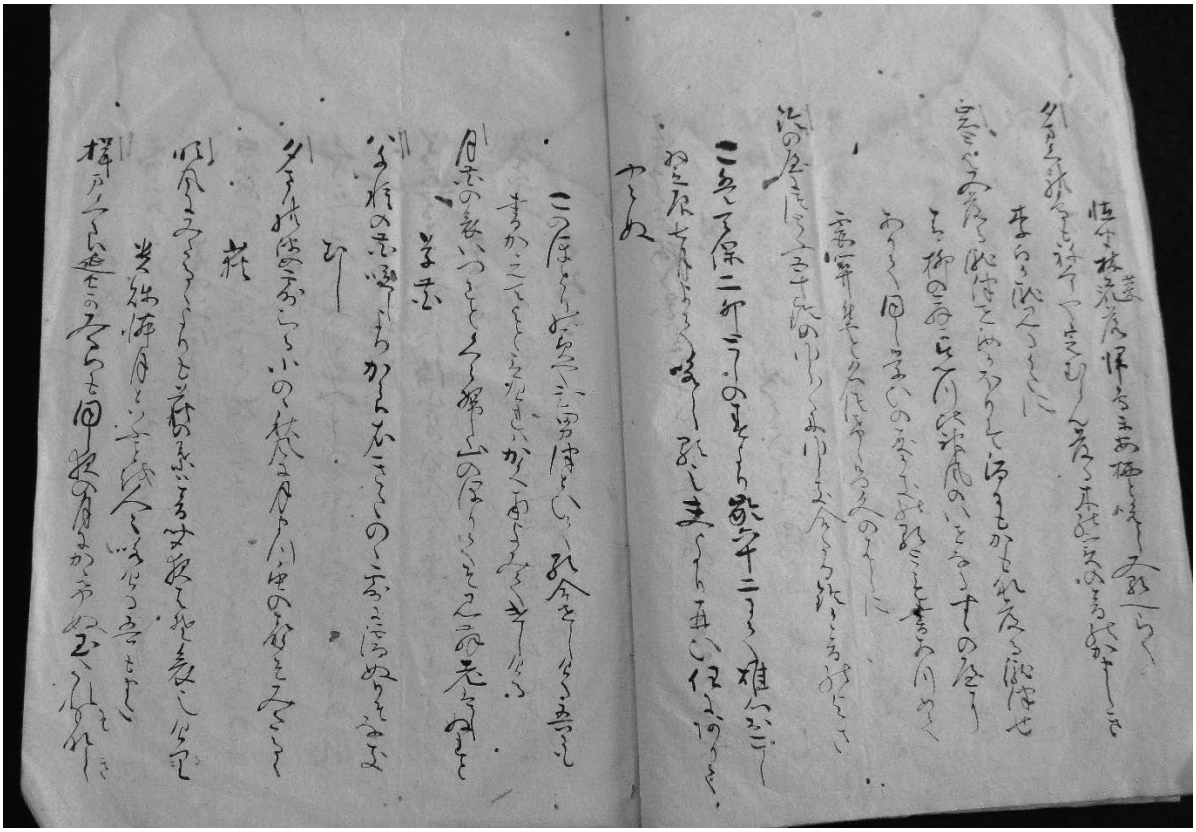
きみを待　ひかずばかりに　くはゝりし　さ月はかひもなきことし哉　（歌番号1128）『向陵集』

望東尼のこの歌は、安政四年前後の歌なので、漢古亡き後も言道はたびたび田代に行き、田代歌壇の地に長く滞在したことがわかる資

料である。『みのとしうまのとし』の「たしろといふところに、ながくやどりて、かへらざりけるころ」の詞書においても、また、『向陵集』と同じ歌「きみを待　ひかずばかりに　くはゝりし　さ月はかひもなきことし哉」より、言道の田代行の滞在日数の長いことを羨む歌がどちらにも採取でき、田代の地に言道を取られたかのように思う弟子望東の歌が印象的である。

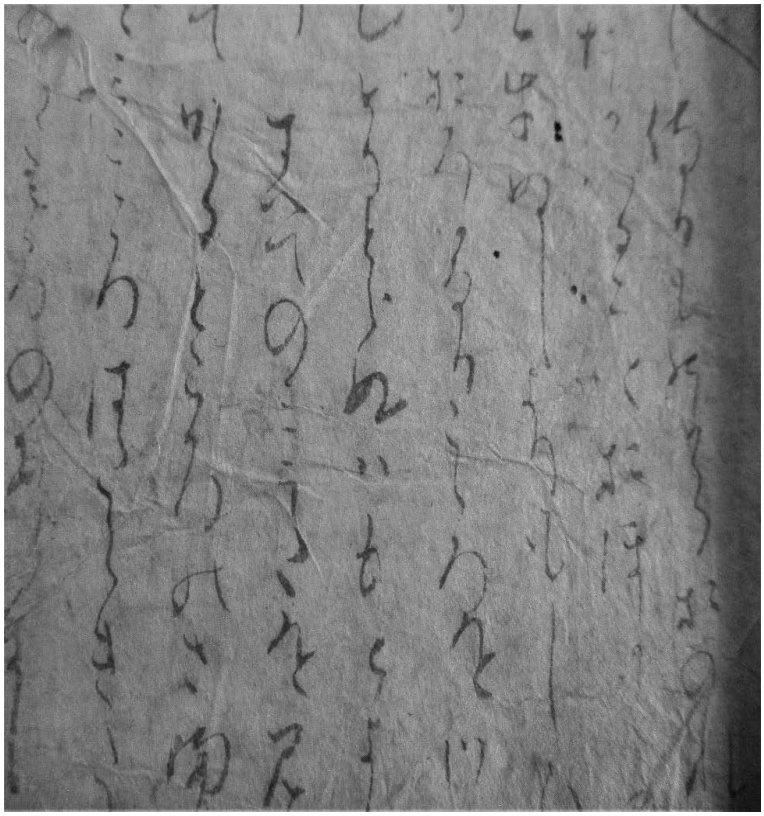
福岡の甘棠館を中心とした亀井南冥における亀門、日田の広瀬家の詩学等は漢古の思想に大きな影響を与え、特に『自覚談』に夥しく引用された淡窓、旭壮、多久の草場珮川らの文言は、漢古に於いて更に受け継がれていった。また、福岡の青柳種信の国学、南冥、昭陽から連なる二川相近門下の言道の和歌と、更には、佐賀の蟹守の和歌を結ぶ文化の交渉を経ての田代文化圏の創造は、決して単独では成し得なかったことをこれらが如実に示す。

このように、幕末期の豊かな文化の広がりと文人たちの交流の軌跡を、漢古の『自覚談』『詠草』を一例として辿ることができ、そして、当時の田代文化圏の中での学問の土壌とその裾野の広がりが俯瞰できたと思う。更に、ここで、『詠草』（写真④）の詞書や、言道の批言を詳しく読み進め、『詠草』の全体像を次に見ていこうと思う。



④　漢古『詠草』（鳥栖市教育委員会「曽根崎・古賀家文書」）

（十三）



⑤『詠草』同上　（裏表紙にまで及ぶ言道の朱批）

四　『詠草』と言道の添削

『詠草』の書誌を付す。

○鳥栖教育委員会　鳥栖市郷土資料室　曽根崎・古賀家文書
○書型　大本（縦二十六・五センチ　、横十九・五センチ）
○巻冊　一冊一巻
○刊写　写本
○外題　墨書直書　「詠草」「村山漢古　上」
○内題「詠草」
○料紙　楮紙
○丁数　七丁（墨付き七丁）すべての丁に言道の批言（朱書・墨書）
○歌数　漢古の和歌六十首と言道の和歌一首　合せて六十一首。

漢古から添削を請われた言道は、先にも述べたように、漢古から提出された詠草を一旦全部書写し直し、その上から、言道の朱点と、批言、批評を書き加えて、漢古に戻す形式で、和歌通信教育を行っていったもので、この鳥栖市教育委員会に現存する漢古の『詠草』は、言道自筆添削稿本である。

『詠草』を見てゆくと、『自覚談』だけでは判らなかった更なる文人交流の厚みを伺い知ることができる。例えば、「三橋真国[二八]が朱の墨をもてわが歌巻に書き加え」というところからは、言道の外にも、四阿屋神社神官真国にも添削を請い、朱批をもらったことがわかる。

また、「古賀穀堂[二九]、世をよくせし頃、亀井元鳳身まかりぬ」の詞書では、古賀精里[三〇]の長男で、佐賀藩主鍋島直正の教育係だった儒

者古賀穀堂や、亀井南冥の長男元鳳こと昭陽が没したことに対する文言がある。また、「青柳の翁が先つ比、神風のいせなるすゝの屋にありて、同じ学びの友がきの歌ども書きあつめて霞関集となづける文の端に」（写真④）の文言から、青柳種信[三]や伊勢の鈴屋の文事の情報がある程度タイムリーに漢古に伝わっていることがわかる。

さて、漢古の和歌六十首の最後には、言道の和歌一首と、朱批が一丁分に亘って書き加えられているので（写真⑤）、この部分の七丁の表裏を見ていきたい。

みかへしには、にげなきものから、けふあきたつときゝて

言道

あきゝぬと　きくぞうれしき　ことしより

月見るとものそひぬとおもへば　　」七丁・表

かくは、ものし侍るものから、おのれなにごとをかしり侍らむ。いとたがへることおほからめど、つゝみなくきこえまつれなど、乙平ぬしよりも、しひてものし侍れば、たゝおのれがおろかなるこゝろを、つゝみなくきこゆるばかりになん。とりとらぬは、もとより、みこゝろのまに〳〵なり、すべてのみうたを、見侍るにいとよくよみいで給ひて、かゝることのさまにては、申むねすくなく、いとみこゝろはたらきたるさま、おもひやり侍るなり。おのがこゝろのあらましは、別にきこえ奉る。ひらことをだにみこゝろかなはゝ、いかにうれしう侍らん。かたみにつゝみなくものし給へかし。あなかしこ。

言道

村山のうしに　　」七丁・裏

「みこゝろのまにまに」歌を真心から自然に作り、「ひらこと」つまり気取らず、平らかな言葉で、心を表現できる歌が作れたらいいと、丁寧にそして平易に教えている。

それを言い換えると、次の様に言道の歌論にも、

狂歌俳諧などの俗談平語こそ　今の世のおのづからなる調なるべけれ。されどそはいと卑しげなれば、殊更に撰みてわざと歌をものするも是非なきわざとなれるか（中略）歌詞を習ひてかまへて詠むも、こころは真心ながら、作はつくり物なれば、おのづからうめき出でたる磋嘆とはいひがたし　　『こぞのちり』

とある。「平語」を使用しながら卑しくならない言葉を選び、かつ「真

（十五）

心」で、自然と心から呻き出たことばで歌を詠むことを理想とした。その歌論の実践が『詠草』の評に垣間見える。そして、また

物に触れ事に依りて、即座に感発する咏嘆なり。詞の近古などを撰む暇あらんや。今日独言して嘯きあるくが歌の元なれば、歌を以て歌とするは天地のたがひある　『ひとりごち』

「物に触れ事に依りて、即座に感発する咏嘆なり」、「独言して嘯きあるくが歌の元」と、物に即座に感応してことばが出るという心のあり様を解き、歌の元、根源は、心の感動にあることを、平易な言葉で根気強く説いた、その門下指導の実態が、この『詠草』にも表出されていることを見出すことができる。

２４番歌では「光残憐月といふことを人々詠ける吾もまた」の詞書で、「旅まくら蜑がみるめも同じ夜の月にかゝげぬ玉だれもなし」と詠ったのに対して、これを言道は、結句を「玉だれぞなき」と添削して二重の長点を付けこの句を合格とした。

また、３８番歌「浦檮衣」では、初句の「浦おとめ」を、表記の誤りとして「裏をとめ」と訂正し、「いとまも浪のよるふけて」に続く下句「哀れ砧の音たゆみ行く」を全て見せ消ちにして、「たゆむきぬたの音哀れ也」と添削したのち、長点を付けている。

２１番歌「八千種の花咲しよりから衣きたのゝ露に濡ぬ日ぞなき」や、２８番歌「山中尋花」「若かへる春のひかりに深山辺の老木も花をわすれざりけり」５０番歌「こぐ舟の影もほのかに明そめてしづみかねたる水うみの月」などは、添削なしに二重長点の歌であった。

漢古の和歌六十首の内、長点が付いた歌は、六十首中、五十一首。その中で、二重の長点は八首であった。つまり、ほとんどの歌に、合格点が付いたことになる。

やはり、儒学者として名を馳せている漢古に対して、「すべてのみうたを、見侍るにいとよくよみいで給ひて、かゝることのさまにては、申むねすくなく」と、書き付けるあたり、どうしても遠慮が感じられ、ここでは、門下生というよりは、客人といった趣きが感じ取られる。実際は、歌が拙くとも、それでも、「良く詠まれている。申し分ない。」と褒め、六十歳を越えて、新たに和歌を学ぼうとする漢古の熱い思いを受け入れ、言葉をかみ砕いて導き、また、敢えて厳しい批評は抑えていた言道の姿があった。

五　おわりに

以上、草場珮川、広瀬淡窓、広瀬旭荘などの文言を引用して、漢古の儒学者としての立場からまとめられた『自覚談』と、大隈言道などから指導された和歌集『詠草』を手掛かりとして、漢古の多彩な文事とその活動を辿ることにより、田代の豊かな土壌に育まれた文化圏の質の高さを検証することができたと思う。

加えて、この度新たに、鍋島治茂、斉正、直正の三代に、御典医として仕えた轟木出身の古賀朝陽[三]と、漢古とが漢詩の交流があったことがわかる資料が見つかったことは、漢古の文事に於ける幅広い人的交流を辿るのに大変有効である。

今回見出されたこの漢詩集の稿本『蕪稿』[三]には、侍医兼書物学訓導であった古賀朝陽らの詩が掲載されており、次の様に書き始められている。

次韻朝陽山人見寄還答謝

百里肥山西與東　相思相望白雲中

白雲只以隣吾意　片々飛来書自通

畳韻重答朝陽山人見寄

河上山川冠大東　君今蝉脱在茲中

請看富貴浮雲似　説甚人間窮與通

これらは、河上渓谷流域の景観を詠み、現在の古湯温泉に続く河上渓谷一帯の自然の豊かさを桃源と呼び、静かに広がりゆく幽玄の世界を描いていく。

他にも詩題、「答朝陽山人」「次韻月澗禅師見寄却答謝」「弥冨某生」「磯君公煥秀才」や、その他「肥水読書亭」や「應徳永某生」などの文言が登場する。

そして次の様な記載があり、

緒君國革執事

郇君太白山人

磯君公煥秀才　　樹下老樵章熊拝

それぞれの人物はまだ全ては確定されていないが、「樹下老樵」が、「郇君太白山人」（漢古）ら三人に批正を乞うている。そして、それに対して、最終丁に、

千秋翁之諸作　玉音玲瓏　間見微瑕
想老廃倦理他　曷汗　翁矣

邨山漢潜評

と、漢古が答えており、漢古自筆の評が記されている。

先に示したように古賀穀堂は、佐賀藩主鍋島直正の教育係であり、朝陽は、奇しくも穀堂の父古賀精里に師事していたことなどを鑑みると、この『蕪稿』に於ける朝陽ともかなり強い繋がりがあると考えられ、佐賀詩壇グループとの密接な文化交流が考えられ、漢古の文事はますます広がりを見せてくれるのである。これらついては、紙幅の都合上、次のテーマとして、田代文化圏とそれを取り巻く文化圏のネットワークの広がりと厚みを念頭に置きながら更に調査を進めていきたい。

一）緒方東海。名は、道。通称は、又右衛門。字は、世祥、国宝。号は、東海。東明館（対馬宋家の田代藩校東明館の前進稽古所）の設立に寄与した。稽古所及び東明館学頭を務めた。享和二（一八〇二）年三月七日没。墓は光徳寺。没後、息子緒方龍蔵が学頭を継いだ。東海孫の緒方蓮も、又その跡を継ぎ学頭となり、東明館の隆盛のために村山漢古の子東一郎とともに奔走した。

二）村山東一郎。字は允仲、号は梧井、諱は舒陽。寛政八年正月九日生まれ。元治元年十二月九日、六十九歳没。十七歳で日田咸宜園入門。田代領府に仕え、手代役元締めとなる。東明館の学政が不振となるも、恩師淡窓を東明館に呼び興隆に尽力した。

三）田中道夫著。『鳥栖市誌』第三巻「中世・近世編」（第五編近世編第四章「地域社会の胎動と繋がり」第三節「地域文化の形成と教育　俳諧の普及と俳人たち」二〇〇八年参照。

四）『自覚談』に関しては、『続日本随筆大成』5吉川弘文館　一九八〇年。

五）村山威一郎著『自覚談と南園耄語』九州謄写堂油印　一九四四年参照。井上敏幸著『鳥栖市誌』第三巻「中世・近世編」（第五編近世編第四章　地「域社会の胎動と繋がり」第三節「地域文化の形成と教育　紀行・記の世界」二〇〇八年参照。

六）淡窓の弟、広瀬久兵衛。正蔵とも。号は南陔。寛政二（一七九〇）年八月二日～明治四（一八七一）年九月二十九日八十二歳没。兄淡窓に代わり豊後日田の諸藩御用達博多屋を継ぐ。

七）生馬寛信著。「田代領の教育」『鳥栖市誌』第三巻「中世・近世編」（第五編近世編第四章「地域社会の胎動と繋がり」第三節「地域文化の形成と教育」二〇〇八年　参照。

八）『懐旧摟筆記』巻四（『増補淡窓全集』上巻　思文閣・一九七一）参照。

九）草場珮川漢詩集『珮川詩鈔』（多久市郷土資料館蔵。嘉永六年刊）草場珮川は、天明七（一七八七）年一月七日～慶応三（一八六七）年十月二十九日、八十一歳没。多久の儒学者。二十五歳で朝鮮通信使の応接。詩文や書画は通信使から奇才と呼ばれた。藩校弘道館教授。

一〇）野村もと（望東尼）は、幕末の女流勤皇歌人。（文化三年～慶応三年）夫貞貫と共に、大隈言道に入門。著作に『向陵集』（大隈言道序）『ひめしま日記』等。

拙稿「野村貞則『こころやり』翻刻・解題　―福岡市博物館蔵野村望東尼資料から」『九州情報大学研究論集』第九巻　二〇〇七年　参照。

拙稿「大隈言道研究　年譜編第Ⅰ部」『九州情報大学研究論集』第十六巻二〇一四年、『大隈言道研究　年譜編第Ⅱ部』『九州情報大学研究論集』第十七巻　二〇一五年　参照。

二）小林重治は、飯塚の商人。言道の歌集『草径集』の出版の折には、最大の出資をし、援助を惜しまなかった人物である。重治の詠草『自詠集中抄』を、

言道がまるごと浄書してやり、その上から更に朱で添削を行っている。言道の実作指導と添削の跡を知ることができる。

拙稿「大隈言道自筆資料『自詠集中抄』―小林重治家集」『九州情報大学論集』第十巻　二〇〇八年　参照。

二）石野廣通編『霞関集』寛政十一（一七九九）年刊。江戸中心の武家歌人達の歌集。巻五、六の巻末に「霞関集　全部八十一歳翁書/墨附百六十二枚/外序三枚萬彦書/蹄渓蔵版　寛政十一年巳未秋」「霞関集余親生大人。石野/廣通/自撰併手書（中略）寛政巳未孟秋　葛齋佐々木萬彦」作者目録の巻末に「辻知篤清書」とある。

三）古賀益城（古賀益吉）著『村山漢古翁』非売品（一九六八年）。

四）村山東一郎著。原本散逸、その写しは前注の古賀益城『村山漢古翁』収載による。

五）穴山健翻字「春野集」『福岡女子短期大学紀要』四十一巻　一九九一年。

六）言道の在塾の様子は、言道の門下の野村もと（望東尼）の『講歌集』や、『扶桑会雑記』に詳しい。

七）言道が咸宜園を去った後も、淡窓との交流は続き、天保十三年三月、淡窓は、福岡今泉の言道の自宅池萍堂を来訪、それを淡窓は詩に残す。又、弟の旭荘とは、言道が『草径集』出版のために大阪に滞在中、奈良月瀬の旅の宿「騎鶴楼」で、奇しくも同じ宿帳に、旭荘は漢詩と絵を、その後の頁に、言道は和歌を認めることとなる。

八）拙稿「大隈言道研究Ⅵ歌論『ひとりごち』『こぞのちり』言道の修学過程」『九州情報大学研究論集』第二十一巻　二〇一九年。

九）拙稿「草径集」『和歌文学大系七四』　明治書院　二〇〇七年　参照。

一〇）穴山健翻字「翻刻『笠山集』」『福岡女子短期大学紀要四四号一九九二年。

一一）『今橋集』は、言道自筆稿本。九州大学中央図書館蔵。

一二）拙稿「大隈言道研究　年譜編第Ⅳ部」『九州情報大学研究論集』第十九巻二〇一七年　参照。

一三）今泉蟹守は佐賀の歌人。名を則才、通称を隼太、御蒼生。号は鞆の屋、黎樹園、朏隣居。文政元（一八一八）年に佐賀市与賀町に生まれ、明治三十一（一八九八）年二月七日に大願寺で没す。八十一歳。勤王の志が厚く「勤王百首」を詠む。その他『樟葉十家歌集』、『白縫集』、『鳳鳴和歌集』、『明倫百人一首』、『樟葉百家選』等がある。

一四）中原勇編『今泉蟹守歌文集』（一九七一年）所収、歌集『類題白縫集』万延元（一八六〇）年序。

一五）井上敏幸氏も前出の『鳥栖市誌近世編』において「言道と漢古、あるいは、田代歌壇との交渉は、きわめて密接なものであたことが推測されるのであるが、この田代歌壇は同時に佐賀歌壇からも注目されていた」（五百九十三頁）と述べておられる。また、漢古が言道に入門したのは、「言道の評点を持つ漢古の六十首『詠草』（曽根崎・古賀家文書十五）の中に「天保二卯どしの春」より和歌を始めたとの詞書があり、漢古の歌道入門が六十二歳の折であったことが明らかになった。」（五百九十二頁）と述べられているが、これは、原文から読み解くと、漢古が自分なりに和歌創作を始めた時期であろう。言道は天保三年から弟子を取り始め、この天保三年ごろに、野村もと（望東尼）夫婦が入門したことが記されており、漢古の入門の記載が言道側にもないことからこれは保留としておく。どちらかというと、やはり、漢古の入門時期は、漢古の歌が入集する「笠山集」第三巻（天保六～七年）あたりからではないだろうか、今後の課題としたい。

一六）『甲辰集』は、言道自筆稿本。九州大学中央図書館蔵。

一七）拙稿「望東尼『みのとしうまのとし』翻刻と解題―『向陵集』との関連において」（『文献探求』四四巻、二〇〇六年）参照。

一八）三橋真国は鳥栖市牛原町の四阿屋（あずまや）神社祠官。

一九）古賀　穀堂　安永六（一七七八）年十二月五日生まれ、天保七（一八三六）年九月十九日没、五九才。朱子学者・佐賀藩藩士。年寄。古賀精里の長男。諱は燾。字は溥卿・号穀堂。佐賀弘道館教授。十代藩主鍋島直正（閑叟）の教育係、直正に終生仕えた。

二〇）寛延三（一七五〇）年十月二十日生、文化十四年（一八一七）五月三日没、六八歳。肥前の儒学者。名は樸。字は淳風。通称は弥助。号は精里。代々佐賀鍋島家臣。西依成斎より陽明学を学び，のち尾藤二洲，頼春水と交わり朱子学に転じる。昌平黌に講じ後、江戸幕府儒員、昌平黌教官となる。林述斎、柴野栗山尾、藤二洲らとともに朱子学の振興に寄与する。著作『四書集釈』『大学章句纂釈』『中庸章句纂釈』等。

二一）明和三（一七六六）年二月十日生、天保六年（一八三五）年十二月六日没七十歳。福岡生。名は、種麿・種満 。通称は勝次。号は柳園。福岡藩足軽青柳勝種の次男。文化九年、伊能忠敬の筑前の測量に同行。文政十二年『筑前

国続風土記拾遺』編纂。江戸在勤中に加藤千陰や村田春門の知遇を得る。寛政元年、本居宣長に入門。文化三年、香椎宮大宮司武内出雲と上京時、左大臣二条治孝からの香椎宮の故事の質問に応答。伊能忠敬の委嘱を受けて『宗像三社略記』『後漢金印略考』を執筆。松平定信の命で『和歌紀聞』『音楽紀聞』を筆写。門下に伊藤常足、二川相近など、筑前における国学に寄与した。

三二）安永二（一七七三）年～天保八（一八三七）年、六十五歳没。轟木に生まれる。名は、能遷、字は仲安、通称健道。号は、郷土の朝日山から朝陽。医学を修め、古賀精里に師事したのち、京都に遊学。のち、鍋島藩典薬。その後、侍医兼書学訓導。治茂、斉正、直正に仕える。『朝暘詩集』、『復古傷寒論』などの著書がある。

三三）個人蔵。古賀朝暘などの詩文集。最後の丁に、村山漢古の評がある。

〈付記〉本論を成すにあたり、資料の掲載許可を戴いた鳥栖市教育委員会と、貴重な御教示を賜わった井上敏幸氏、高橋昌彦氏、川平敏文氏に記して謝意を申し上げる。そして、大隈言道研究者 穴山健氏の御冥福を心よりお祈り申し上げる。